

極覧

社研だより
第 96 号

令和 6 年 3 月

発行 京都市小学校

教育研究会社会科部会

責任者 京都市小学校

社会科教育研究会

岡 博 士

今年度を振り返って

京都市小学校社会科教育研究会

副会長 當 麻 章 英

今年度は5月より、新型コロナウイルス感染症が5類へ移行となり、様々な生活の制限が緩和され学校生活もコロナ以前と同じように学習活動や学校行事が行われました。社会科の学習においても、調べる活動において実際に現地に見学に行ったり、人と会って質問したりしながら生き生きと学習活動を子どもたちが進めていたのではないのでしょうか。社会とつながる社会科の学習は「こうでなくっちゃ」という学習活動が思う存分できたのではないかと思います。

全国社会科教育研究協議会（東京）や近畿社会科教育研究大会（奈良）なども、参集の形で盛大に開催されました。京都社研からも6年部会、4年部会が提案し、他府県の社会科好きの先生方に主体的に学習を進める子どもの姿、京都社研の実践をしっかりと発信できたのではないかと思います。

2つの大会において、文科省教科調査官の小倉勝登先生のご講演をお聴きすることができました。講演をお聴きするたびに繰り返しおっしゃるのは、社会科は問題解決的な学習の充実と単元で考える（単元構想）ことが大切だということです。学習指導要領総則では「児童の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力を育成していくことができるよう、各教科等の特性を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。」とあります。社会科における問題解決的な学習の充実は、まさに三つの能力を育て、使える中心的な学習活動となり、社会科を中心にカリキュラムマネジメントをして教育課程の編成を行うことで、これからのグローバルかつ多様性の時代に主体的に関わっていく「生きていく力」を育てることができると考えます。

この「問題解決的な学習の充実」にむけて京都社研としての具体的な方向性は、今年度研究部より提案があった「子どもが調べ進める社会科学習」の研究構想に示されています。これまでよりも、子どもたちが主体的に進め、考える単元構想を創ることにより、社会の質的变化等を踏まえた現代的な課題に対応し生きていくことのできる力を子どもたちに育てることができると考えます。

今年度は、各部会の授業にも参加させていただく機会を得て、5年部会と3年部会の授業に参加しました。どちらの授業も今までの京都社研が大切にしてきた子どもの主体性を引き出し、実際の人やものと触れ合い、子どもに社会を見る目を育てるといった指導者の意識が感じられる授業でした。このような実践が、毎年積み重ねられているということを感じ、京都社研の歴史と実践を今後も引継ぎ、発展させていかなければならないということ強く感じました。

研究会員の一人一人の社会科に対する熱意が、京都社研を動かし、京都の子どもたちの心を動かして、自分事として社会に関わろうとする子どもを育てているということを実感した一年となりました。子どもは、心が動けば自ら動き、調べ考えていきます。今年度の社研の活動をしっかりと振り返り、成果を明らかにして来年度に積重ね「子どもが調べ進める社会科学習」を進めていきたいと考えます。

3年部会

「地域の人々の営みから学びを深め、 自分と地域とのつながりを考える子ども」

3年部会では、地域の様子や人々の姿を通して学ぶことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにすることをテーマに、今年度の研究を進めてきた。また、研究構想の具現化のため、3年生という子どもたちの実態に合わせながら、「子どもが調べ進める社会科学習」の実現を目指してきた。

このような考えのもと学年部会を行い、部員とともに授業づくりを行ってきた。そして、3つの単元を通して授業研究会を行い、研究主題に迫るとともに、研鑽を重ねることができた。以下、その一端を報告する。

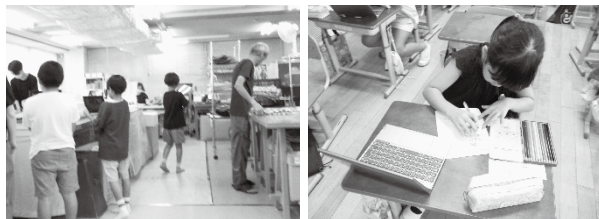
本年度の授業実践

- ①下京雅小学校 上田 亮介教諭 (10月)
単元名「工場で作られるもの」
- ②鳳徳小学校 田村 祐崇教諭 (1月)
単元名「火事をふせぐ」
- ③正親小学校 小澤 茉央教諭 (2月)
単元名「事故や事件をふせぐ」

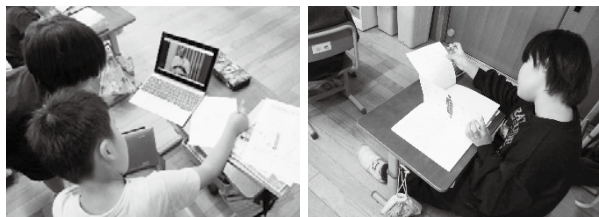
実践① 単元名「工場で作られるもの」

単元の学習問題

なぜ、T（企業名）では、日本だけでなく外国からも注文が来るほど、人気のざぶとんをつくることができるのだろうか。



〈個別の問いについて、見学を通して調べる〉



〈学びを調整しながら、子どもが調べ進める〉

実践② 単元名「火事をふせぐ」

単元の学習問題

なぜ、京都市では、火事の被害が減っているのだろうか。



〈主体性を核とした調べる時間を設定する〉



〈個に応じた支援で、調べる学習の質を高める〉

両単元とも、子どもの問題意識を高め、子どもが主体的に取り組める単元の学習問題を設定することができた。そして、その問いについて予想し、問い化を図ることで、調べる学習の充実にもつながった。調べる学習では、写真のように、子どもたちの主体性を核として調べるということに重点を置いて取り組んだ。

以上のような実践を通して、実践①では、子どもたちは、校区内に日本だけではなく外国からも注文が来るざぶとんをつくる工場があることに誇りを感じ、実践②では、京都市民として火事の被害を減らすために自分たちにできることを考えるなど、3年部会のテーマである「地域の人々の営みから学びを深め、自分と地域とのつながりを考える」ということができた。

小澤教諭による実践③においても、地域の人々の営みから学びを深められるような教材開発を行い、子どもたちの地域に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしていきたい。

〈文責 下京雅小 上田 亮介〉

4年部会

「自分たちの暮らしを支える人々のおもいや願いについて
学びを深めることで、地域社会に対する誇りと愛情をもち、
地域社会と自分とのつながりを考える子ども」

本年度4年部会では、研究主題にあるように「子どもが調べ進める社会科学習」となるようにするためにはどのような単元構成とすればよいのか。どのような子どもたちの姿が調べ進めているのかということを話し合いながら進めていった。以下、実際の実践について詳しく述べる。

本年度の授業実践

- ・ 2月2日 「豊かな自然を生かす宮津市」
正親小学校 井上 正彰教諭
- ・ 3月 「国際交流のさかんな舞鶴市」
七条第三小学校 井上 巧教諭

「学習問題の設定」

子どもたちが調べ進めていくためには、子どもたちが主体的に取り組んだり、調べる時間を十分に確保するために、単元のまとめに直結したりするような問いを設定することが大切であると考えている。

学習指導要領解説には、「自然環境を保護・活用している地域では、人々が協力し、特色あるまちづくりや観光などの産業の発展に努めていることを理解できるようにする。」とある。そこで、「豊かな自然を生かす宮津市」の学習では、「宮津市役所」「京都府丹後土木事務所」「京都府の港湾局」「阿蘇海環境づくり協働会議」が地域住民を中心としたボランティア団体の代表「天橋立を守る会」「天橋立名松リバス実行委員会」、地域内外のボランティア団体「天橋立まもり隊」など、数多くの団体が、世界に誇れる価値のある宝物である天橋立を守るために協力しながら活動しているということを学習させたい。

そこで、第一時で宮津市にある天橋立について昔から親しまれてきていることや、白砂青松といわれ砂浜や松林や海を含めた景色を楽しむことが出来る場所であるという事実を掴ませる。

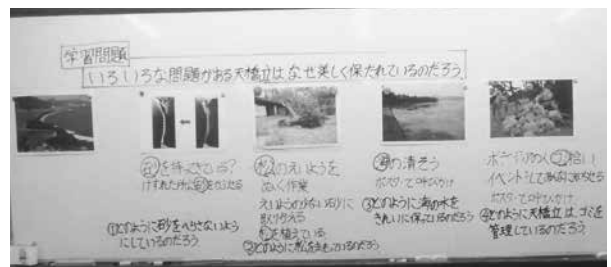
その上で第二時では、「天橋立を保全しなくなったら白砂青松ではなくなってしまう。」という京都府のホームページの文言から疑問をもたせて、写真資料を使って天橋立には様々な問題があるという事実を調べさせる。その上で、天橋立の衛星写真の資料を提示し、砂浜が削られてしまった40年前と砂浜が回復した現在の姿を比較することで、「天橋立にはいろいろな問題があるのに、なぜ美しく保たれているのだろう。」という学習問題を設定する。

「見通しの充実」

学習問題を設定したあと、子どもたちの既習や生活経験を使った予想をもとに、問い化していくことで、

「どのように波から砂浜をまもっているのだろう」
「どのようにして末を保護しているのだろう」
「どのようにして海の水を綺麗に保っているのだろう」
「どのようにして天橋立がごみで溢れないようにしているのだろう」

という4つに問い化できると考えられる。このように調べることを明確にして学習問題について調べていきたい。



問い化することで、子どもたちは調べることが明確になり、学習意欲が高まった。

問い化するまでに出会わせておく事実や資料によって子どもたちの問いが広がりすぎたり狭まりすぎたりすることが分かってきた。単元のゴールへ向かって適切な内容の問いが作れるような資料を精選して授業づくりをしていきたい。

〈文責 唐橋小 仙波 俊輔〉

5年部会

「社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども」

本年度の授業実践

- ・「水産業のさかんな地域」
岩倉南小学校 猪股 健悟教諭
- ・「自動車をつくる工業」
小栗栖宮山小学校 西田 圭孝教諭
- ・「わたしたちの生活と森林」(2月下旬予定)
上里小学校 松本 花観教諭
山階南小学校 上口 洋平教諭

岩倉南小 猪股 健悟教諭の実践について

猪股教諭の授業実践では、視点1-1、として、子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する工夫を図った。本単元「水産業のさかんな地域」において、【なぜ日本では、いつでもどこでも新鮮な魚が食べられるのだろうか。】という学習問題を設定した。まず、校区内にある回転寿司チェーン店を取上げ、どのような魚が提供されているか、考えた。調べたことから分かったことは、①1年間を通して、まぐろやサーモンなどの魚を食べることができること、②京都や大阪、東京など、日本のどの店舗でも同じ魚が提供されていること、③生簀の中には、生きて泳いでいる魚や貝がいるので、新鮮なまま食べることができること、を知った。子どもたちからは、なぜ1年間を通して、どの魚も食べられるのだろうかやいつでもどこでも同じ魚を食べられるのだろうかといった疑問が挙げられた。この疑問をキーワード化し、子どもたちとの対話でつなぎあわせ、以上の学習問題をたてることができた。そして、学習問題に対して、予想を行った。「その店舗に近い海で魚介類を獲り、すぐに運んでいるからではないか。」「いつでも同じ魚が獲れるように、魚を育てているのではないか。」といった予想が次々と挙げられ、次時の予想をもとに問い化する流れへと導くことができた。

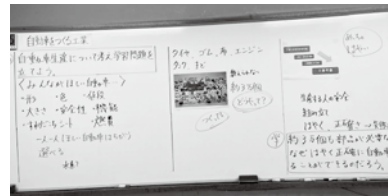


このように、子どもたち自らが学習の主体者となり、主体的に取り組む実践となった。

小栗栖宮山小 西田 圭孝教諭の実践について

西田教諭の授業実践では、視点1-1、2-1として、学習問題の設定、見通しを持つことの

工夫を図った。本単元「自動車をつくる工業」では、工業学習に入口のため、子どもたちにとっては、未知の分野であると想定し、単元を組み立てた。また、普段自動車にほとんど乗らなかったり、車種の豊富さを知らなかったりする子どももいる。そこで、まずは自動車購入シミュレーションを使用し、消費者の要望に限りなく近い自動車が生産されていることに気づくことができるようにした。そして、そのような自動車が年間100万台を超える生産台数を誇り、1分間あたり数台を生産している事実を捉えられるようにした。また、自動車は3万を超える部品から生産されていることにも繋げて生じる疑問から、【一人一人ほしい自動車は違い、一台に部品が3万個も必要なのに、自動車工場ではなぜ正確に速く自動車をつくることができるのだろうか】と、子どもたちの疑問や考えたことから、学習問題を設定した。設定した学習問題に対して、予想をすると、①自動車はどのように作っているのか。②自動車の部品はどのように作っているのか。③作られた自動車はどのように運ばれているのか。といった問いが生まれ、



次時への調べ学習につなげることができた。このように、社会的意味や特色を問う問いを設定したことにより、様々な予想が生み出され、子どもたちが見通し調べる学習が充実すると考えられる実践となった。

上里小 松本教諭 山階南小 上口教諭の実践について

松本教諭、上口教諭の両実践では、視点1〈学習問題の設定〉、視点2〈見通しの充実〉を目指し、単元「わたしたちの生活と森林」の学習問題づくりを行う予定をしている。この実践では、【外国産の森林が安くて、丈夫で、使い勝手がいいのに、なぜ国産の木材を守っているのだろうか】という学習問題を設定し、単元の学習に導きたいと考えている。またその学習問題の予想を問い化することで、単元の内容の獲得につながると考えている。

〈文責 紫野小 林 奈央人〉

6年部会

「社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから
学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども」

6年部会では、研究部の主題設定を基に、政治・歴史・国際社会について学んだことを自分とつなげて考える社会科授業を目指していった。また、小学校社会科としての系統性に注目し、他学年との情報交換を大事にして連携しながら、部会の形を工夫していった。さらに、教員としても学び続ける存在であるために、ニーズに合わせた勉強会を設定していけるように心がけた。

実際に6月より6年部会を設定し、毎月1回以上のペースで実施していくことができた。部会の際は新たに入会された先生方の授業作り・学級経営に関する相談会を実施し、次単元の教材検討や同和単元の指導法などを気さくに話し合えた。時にはオンラインでも部会を設定し、校務の都合で現地参加ができない教員も気軽に参加をして、部会を深めていった。令和5年度東京大会における6年部会の提案に関しても部会のメンバーを中心に意見を交流しあい、よりよい実践発表につなげていった。このような積み重ねの中で、以下の授業実践を行っていった。

本年度の授業実践

- ・12月5日 「世界に歩み出した日本」
九条塔南小学校 洲崎 陽大教諭
- ・2月中旬 「日本とつながりの深い国々」
安井小学校 飯田 岳人教諭

◎令和5年12月5日（火）

九条塔南小学校 洲崎 陽大教諭

単元「世界に歩み出した日本」に関して

問いの設定において、「なぜ～（本時では、『日本はなぜ領事裁判権をなくすことができたのだろうか』）」から始まる問いにしていくことで、知識・方法・手段だけにとどまらず、因果関係や意味まで踏み込んで予想したり、調べたりする様子が見られた。また、本単元・本時の学習までに継続して「なぜ～」を考える学習を積み重ねることで、子どもたちの思考やつぶやきが深まっていく姿が見られた。

前単元「明治の国づくりを進めた人々」の学習で日本が国力を充実させていくために様々な

諸制度や改革を実施していたことを子どもたちは概ね理解していた。その土台を生かしつつ、失敗が続いた条約改正

が、今回なくすことに成功したという新たな事実を知り、子どもたちは自発的に調べたいという思いをもち、積極的に調べようとする姿が見られた。実際の調べる活動においては、指導者が児童の実態に合わせて資料を精選して（世界の領土支配面積の図、陸奥宗光の交渉、日本の産業の様子グラフを使用）、ロイロノートで子どもたち各自が選択して調べられるようにし、一人で学ぶ時間ももちろんのこと、友達との意見を交流し合ったときにも、うまく生かしながら学びを深める様子が見られた。

大きな単元として「日本の歴史」として捉え、本単元だけに限らず、前単元までの政治制度の仕組みや文化の様子、歴史人物の行動や考えを知り、それを各自の振り返りとして記録に残すようにしていった。特にそれぞれの時間の最後に「この後日本はようになっていくのか」の問いかけを入れることで、次時・次単元への予想につなげることができた。指導者としても、子どもたちの学びの到達度を確かめ、次の学習の調整に生かさせた。

歴史単元においては、思考して活動していくためにも、必要最低限の知識を更新しておくことが求められる。その内容が多いため、全ての単元において複数時間に渡って子どもたちそれぞれの学習問題に沿って調べるといった授業設計を組み切ることができなかった。国際単元の授業実践では教材検討して工夫していきたい。

〈文責 洛央小 石原 一繁〉



研究集会を終えて

研究主題「子どもが調べ進める社会科学習」のもと、①学習問題の設定②見通しの充実③調べる学習の充実④持続可能な評価⑤系統的に育むの五つの視点から研究実践を行ってきました。研究集会では、朱雀第一小学校の根津亮介先生に4年生の「古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市」の単元で単元の学習問題づくりの場を授業実践していただきました。「なぜ」の学習問題をいかに設定するか、さらにその問題の解決の見通しまでをどのようにもたせるか、という視点から検討を重ねました。「なぜ」の問いを成立させるために、子どもたちが社会的事象を調べて一定の知識を獲得すること、その獲得した知識の矛盾からなぜの問いを見いだすことを目指しました。

実践では、宇治市では街中のいたるところでお茶に関わるものが見られること、それだけお茶を売りにしているにもかかわらず、生産量は特別多いというわけではないということ、その矛盾点から「なぜ」の問いを設定することができました。また、この問いを設定するまでに要した時間35分ほどでした。残りの時間でこれからの学習の見通しをもつという実践にも取り組みました。問いを作って終わるのではなく、さらに一人一人がこれからの学習の見通しをもつことで、調べる学習の充実につなげる学習の一端が見られたました。



今年度、社会科の学習の一部の充実を図るのではなく、単元全体の学習の充実を図る取り組みを進めることを目指してきました。子どもたちが個々の問いについて主体的に調べること、令和の時代の充実した社会科学習が実現できると考えます。そのさらなる充実に向け、この5つの視点からさらなる研究実践を積み重ねていきます。

〈文責 研究部 部長 加藤 俊介〉

伝統技術にふれる直接体験 「子ども体験教室」京扇子をつくってみよう!

今年度はコロナ禍を経て、4年ぶりに「子ども体験教室」を実施することができた。

以前と同様に「京扇子を作ってみよう!〜プロの方々に教えてもらって、自分のオリジナル扇子を作ってみよう〜」と題し、令和5年12月23日(土)に京都市総合教育センター4Fの永松ホールにて、抽選により当選した47名の児童(当日欠席3名)で行うことができた。4年ぶりの開催ということで人数が集まるのか不安もあったが、募集の段階で195名もの全市の児童から応募があり、直接体験への関心の高さの一端を伺うことができた。講師としては、こちらでも以前と同様に京都扇子団扇商工協同組合青年部の方々6名をお招きし、ご指導をいただいた。

自分が描いてきた折地に、地吹きと呼ばれる空気を入れる作業、そして扇骨を差し込むことを体験する。子ども達は職人さんが簡単そうに行う姿を見るも、自分でやると一見簡単そうでも難しい。地道な作業に苦戦する子ども達の姿も見られたが、職人さんが一人一人に丁寧に声を掛け、作業にアドバイスをくださった。その職人さんの姿に、これまで培ってきた技術に驚きを示す様子がたくさんの子から見られた。

また上にも述べたが、今年度参加した児童は伝統文化に対して、とても関心の高い様子が伺えた。下の画像は、扇子の完成を待つ間の様子である。職人さんの近くでその技術を伺い、質問をする姿も多く見られた。また保護者の方も職人の方の作業を見守る様子が見られるなど、以前までよりも大人も子どもも一体となって伝統文化に触れ、学ぶ時間となっていたように感じる。直接体験が出来る場のよさである。



子ども達の感想をいくつか紹介する。(一部抜粋)

- 扇子を開いてみると、おり紙で作った扇子と違い仕上がりがとてもきれいですごかったです。
- 竹の骨を入れるのが難しかった。プロの人が作ってくれるのを見れたのが楽しかった。

直接体験するからこそ、伝統技術のすごさを肌で感じ、子ども達も大人も受け継がれてきた歴史や伝統、自分たちの暮らす京都の郷土のよさを感じる様子が伝わってきた時間となった。この取組が子ども達の社会科を始めとした学びへの意欲をより高め、地域社会への誇りや愛情を育む一助となることを願っている。

〈文責 実践講座委員 清水 一希〉